

「宮清め」

2014年10月21日

マルコによる福音書 11 章 15 節～19 節。それから、一行はエルサレムに来た。イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いしていた人々を追い出し始め、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けをひっくり返された。また、境内を通過して物を運ぶこともお許しにならなかった。そして、人々に教えて言われた。「こう書いてあるではないか。『わたしの家は、すべての国の人の／祈りの家と呼ばれるべきである。』／ところが、あなたたちは／それを強盗の巣にしてしまった。」祭司長たちや律法学者たちはこれを聞いて、イエスをどのようにして殺そうかと謀った。群衆が皆その教えに打たれていたもので、彼らはイエスを恐れたからである。夕方になると、イエスは弟子たちと都の外に出て行かれた。

上記の出来事は「宮清め」と言われている。エルサレム神殿は最も奥まった所に契約の箱が置かれた「至聖所」があり、順に「祭司の庭」、「イスラエル人の庭」、「婦人の庭」、「異邦人の庭」と、塀で仕切られていた。職業、性別、民族で入れる場所が区別、差別されていた。「宮清め」が起こったのは「異邦人の庭」であった。ここには、出店が並んでいた。お土産屋ではなく、献げ物に関する店である。一つは両替である。ユダヤ人は世界に散らばっており、彼らは生活している国の貨幣をもって巡礼に来たが、神殿へはイスラエルの貨幣で献金しなければならなかった。他国の貨幣をイスラエルの貨幣に両替する「店」である。もう一つは、いけにえに献げる鳩や羊を売る「店」である。この場所を「アンナス広場」と言っていた。当時、大祭司はカイアファであったが、義父のアンナスが実質的な、影の権力者であった。権力を維持するためには財力がある。彼は「アンナス広場」の売り上げを手中にしていた。いけにえの鳩は町の 15 倍の値段で売られ、ここで買った物しか、献げることができなかった。両替も法外な手数料を取っていた。エルサレム神殿に憧れて来た巡礼者たちは莫大な出費を強いられていたが、権威ある神殿のしきたりには従わざるを得ない。民衆の不満は渦巻いていただろう。

主イエスは、売り買いしていた人々を追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けをひっくり返した。生涯の中でただ一度、この暴力事件を起こされた。しかし、人に危害を加えたとは記していない。そして「こう書いてあるではないか。『わたしの家は、すべての国の人の／祈りの家と呼ばれるべきである。』／ところが、あなたたちは／それを強盗の巣にしてしまった」と怒りを露わにした。

ガリラヤの一介のラビ・イエスは、神殿当局が支配する「アンナス広場」で「祈りの家を強盗の巣にした」と言って、暴力事件を起こした訳である。神殿当局のメンツは丸つぶれである。祭司長や律法学者たちは、何としても、主イエスを殺そうと決意を固めた。民衆は法外な値段で売られている現状への主イエスの抗議に拍手大喝采を表した。彼らの賛意と支持を見て、神殿当局は主イエスに手出しできなかった。どんなに権威、権力があろうとも民衆の意向に反する行為に出ることはできない。彼らは自分たちの強欲さを指摘され、手出しもできず、腸が煮え返っただろう。

宗教が巨大化し、墮落すると、このよう収奪が起こる。主イエスの「宮清め」の暴力事件でエルサレム神殿が悔い改めることはない。主イエスも、悔い改めを期待してはいなかっただろう。墮落した神殿への抗議のパフォーマンスであった。この事件で主イエスに対する殺害の気運は一気に高まった。受難週の緊張は「宮清め」から始まっていく。